地域の資源を活かした自然保育に関する研究

The Study of Childcare and Education Based on Nature Utilizing Local Resources

柴田　　卓※　　柴田千賀子※※
Suguru Shibata　　Chikako Shibata

In this study, we considered natural childcare utilizing local resources from three perspectives. One is from a questionnaire for childcare workers in Fukushima. The second is from a childcare practice cases in Japan. The third is from a Danish practice cases. In the future, if we are going to develop a wide range of learning through childcare practices that make use of the resources of nature in Japan, we will continue to practice while exploring uniqueness based on the characteristics of Japan and using overseas natural childcare as a model. It is necessary for practitioners and researchers to carefully discuss the potential, convenience, risk of nature as a resource.

１．はじめに

近年，子どもを取り巻く環境は急速に変化している。屋内環境や人工的で安全な場所や空間での生活が多くなり，スマホやゲーム依存が問題となるなど，テクノロジーの発展と共に直接的な体験から学ぶ機会や自然と関わる機会が減少している。今年流行した新型コロナウイルスの影響による不要不急の外出禁止や３密防止などの新しい生活様式もまた，子どもを取り巻く環境に大きな変化をもたらした。こうした子どもを取り巻く環境の変化に対し，森や自然を活かした子育て支援や保育実践が注目を集めている。2005年には森のようちえん全国交流フォーラムが開催され，その後2017年には特定非営利活動法人森のようちえん全国ネットワーク連盟が設立された。学術的な分野においては，2015年に日本自然保育学会が誕生しており，自治体レベルでも同年に，長野県が「信州型自然保育認定制度」，鳥取県が「とっとり森・里山等自然保育認定制度」を創設している。次いで，2018年には「森と自然の育ちと学び自治体ネットワーク」が設立されている。このように，森や自然を活用した幼児期からの学びは再評価される傾向にあり，教育的効果や生理学的効果に加え，地方創生の観点からも期待が高まっている。また，自然を活かした保育と幼稚園教育要領[1)]との関連では，幼稚園教育の基本の中で，「幼児期の教育は環境を通して行うものを基本とする」と明記されており，領域

※　幼児教育学科　　※※　仙台大学

「環境」においても，「幼児期において自然の持つ意味は大きく，幼児が自然と関わりを深めることができるように工夫すること」と明記されている。さらに，2017年の幼稚園教育要領の改訂では，幼児期の終わりまでに育って欲しい姿の中に「自然との関わり・生命尊重」が明記されていることからも，自然との関わりや自然からの学びは，子どもの成長や生きる力の基礎を養う重要事項として位置づけられていることが理解できよう。ところで，ここでいう環境とは，園庭や園舎を含む保育施設を指すわけだけが，無藤 (2018) は，「幼児教育が持つ最大の危険は，子どもを閉じ込めやすいということだ。安全に作られ気温も管理された室内で完結することも可能だが，囲われた場所から外に出ていくことは非常に重要であり，園庭と地域資源を組み合わせた環境構成も必要」[2] とし，地域資源を活用することの重要性について言及している。また，松橋ら (2010) は，保育施設における屋外環境と園外活動の実態から地域資源の在り方について調査し，公園や道が子どもたちにとって多様な体験を積み重ねる重要な保育環境であり，地域との貴重な交流空間として利用されている[3] としている。このように，保育実践において地域の資源を活かすことの重要性が論じられているものの，保育の場に目を向けると，自然保育への助成や活動への支援など，公的資金の投入には未だ格差がある状況であると言わざるを得ない。さらに，筆者の所属機関のある福島県では，東日本大震災の影響から，外遊びや自然保育を自粛せざるを得ない状況が続いたこともあり，外遊びや自然保育に対して，消極的な認識を持つ地域があることも見えてきた[4]。このような実態の背景にあるのは，地域の資源を活かした活動が保育実践にどのような利益をもたらすのか，その具体的な効果や成果が示されていないことに加え，本国における自然保育の動向も明確になっていないことが挙げられる。

そこで，本研究はこれまでに筆者が調査した海外の保育事例や，国内で実践している保育活動を基に，地域の資源を活用した自然保育について多角的に考察を加え，国内の自然保育の普及に寄与することを目的とした。

2．研究方法

はじめに福島県内の保育者を対象に実施した自然保育の実態について取り上げる。全国調査ではないが，福島県全体の動向を提示することで，今後，他県との比較検討に有益な情報となることを期待すると同時に，地方の一般的な保育施設の動向を示すことが目的である。次に，国内の事例として，福島県内で実施されている地域の資源を活かした自然保育の事例を取り上げ，その教育的意義および多角的な可能性について考察を加える。最後に，国外の事例として，これまで筆者が調査訪問したデンマークの施設を取り上げ，地域の資源を活用した保育事例について考察を加える。なお，調査内容と調査施設は以下の通りである。

１）自然保育に関する国内調査

本稿で取り上げる調査結果は，筆者（柴田卓）が2019年５月～６月に実施した福島県内の幼稚園，認定こども園，保育園，保育所の計619施設を対象として実施した質問紙調査である。有効回答数は310件であり，調査方法および結果の詳細は柴田2020[5]で報告している。これらの調査結果から本稿では自然保育に関連する項目を整理して取り上げる。また，「自然豊かな場所での保育事例や自然体験活動」に関する設問（自由記述）は，本稿ではじめて取り上げる項目である。

２）地域の資源を活かした自然保育の国内事例

地域の資源を活かした自然保育の事例として，筆者が関わる福島県内の保育実践を２つ取り上げる。事例１は，福島県田村郡小野町の公立幼稚園で実施している「おのまちわかばたんけんたい」である。この活動は，2017年からはじまり，概ね年７回の頻度で町の名所や公園に出かけ，昼食を含む４時間程度を自然の中で過ごしている。事例２は，福島県田村郡三春町の公立幼稚園で実施している「なかさとちびっこたんけんたい」である。この活動は2020年からはじまり，概ね年４回の頻度で町の自然公園に出かけ，昼食を含む４時間程度を自然の中で過ごしている。この２つの保育実践から，地域の資源をどのように自然保育に活かすのか，またその教育的意義について考察を加える。

３）地域の資源を活かした自然保育の国外事例（デンマーク）

国外の先進的な自然保育として，筆者らがこれまでに調査訪問したデンマークの下記施設について，事例を基に考察を加える。

・クロスターマルケン総合保育園（Børnehuset Klostermarken）2019年８月調査
・ローゼンリュースト総合保育園（Børnehuset Rosenlyst）2019年８月調査
・スコウボ森の保育園（Skovbo Skovbørnehaven）2015年８月，2016年８月調査
・トーンビュー自然学校（TårnbyNature School）2019年８月調査
・アマーストランドネイチャーセンター（Naturcenter Amager Strand）2019年９月調査

３．事例と考察

１）自然保育に関する国内調査

筆者は，福島県の保育施設を対象に，東日本大震災後の外遊びと自然保育の実態を把握することを目的に2019年に質問紙調査を実施した。その結果から本稿に関連する結果を整理したのがFigue.1～7である。Figue.8は，秋田らの調査[6]を参考に，同調査の自由記述を改めて整

理したものである。これらの調査結果をもとに，以下に自然保育に関する保育者の認識について取り上げる。

まず，「現在，幼児に自然豊かな場所での保育活動・自然体験活動は必要だと思いますか」(Fig.1) という設問において，62%の保育者が「とてもそう思う」，37%が「そう思う」と回答し，99％の保育者がその必要性を実感していることが確認された。次に，「震災前と比べ，現在の幼児は自然と触れる・関わる遊びを行っていると思いますか」(Fig.2) という設問では，37％の保育者が「震災前と変わらない」と回答したが，41%が「そう思わない」と回答したことから約４割の保育者が現在の幼児は自然と触れる・関わる遊びが十分に行われていないという認識を持っていることが明らかになった。

次に，園舎・園庭内の自然と触れる活動の頻度に関する「現在，自然豊かな場所での保育活動や自然体験は，どのくらいの頻度で実施していますか」(Fig.3) という設問では，72％の保育者が毎日と回答したことから，約７割の保育者が園庭の環境を活用して動植物と触れる活動を行っていることが示唆された。一方，自然豊かな場所での活動頻度に関する「自然豊かな場所での保育活動や自然体験は，どのくらいの頻度で実施していますか」(Fig.4) という設問では，毎日と回答したのは19％，週に１回程度は17％，月に１回程度は23％，年に１回程度は40％であった。特に，４割の保育者 (保育施設) が年１回程度と回答したことから，地域資源を活かした保育活動の意義が認識されていないことやその難しさが浮き彫りになった。次に，保育で活用している地域資源の数に関する「保育で活用している自然豊かな場所 (森・海・自然公園・神社・自然の家など) がありますか」(Fig.5) という設問では，「ない」と回答したのは22％，「１～２か所」は45％，「３～４か所」は20％，「５か所以上」は14％であった。この設問においても，約２割の保育者 (保育施設) が「ない」と回答した。この点においても，地域資源を見直すことによって保育に活かせる場所を増やすことは可能である。次に，「自然豊かな場所での保育活動・自然体験活動を実施する上で，ストレスとなることを３つ教えてください」(Fig.6) という設問では，「交通手段の確保」が153件で最も多く，次いで「場所の選定」が149件，「自然のリスク」が113件，「予算の確保」が90件，「活動内容」が83件と続いている。近隣の公園においては，歩行による移動中の事故が懸念され，遠方においてはバスの手配など移動手段の確保がストレスとなっていることが考えられる。移動手段に関しては，私立の幼稚園であればクラス単位での活動にすることで送迎用のバスを活用することができ，公立の施設であれば町のスクールバスを活用するなどの工夫と対応が考えられる。予算に関しては，各自治体による自然保育認定制度のような仕組みを作ることによって資金を助成することも考えられる。場所の選定や活動内容に関しては，保育に活用できる地域資源を見直し，そこでの活動事例を蓄積し、その情報を共有することも考えられる。また、自然のリスクに関しては，園内・園外研修で専門指導を受けたり，活動に対して専門指導者を依頼したりするなど，地域

の人的資源を活用することで不安を軽減することが期待できる。次に,「自然豊かな場所での保育活動・自然体験を実施する際，サポートとして有効なものを３つ教えてください」(Fig.7) という設問では,「場所情報の提供」が274件と最も多く，次いで「予算の確保」が236件,「下見・準備」が224件,「専門指導」と「企画立案」が同数で174件であった。これらの結果からも,「場所の選定」に関する情報提供が地域資源を活かした保育を普及させる際に最も有効であることが示唆された。次に,「貴園で実践している自然豊かな場所での保育事例や自然体験活動を教えてください」(Fig.8) という自由記述の設問では，309件の有効回答数

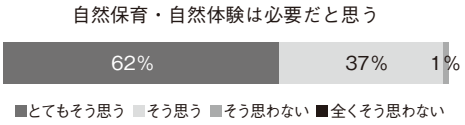

Figure. 1
自然保育・自然体験のニーズに関する認識

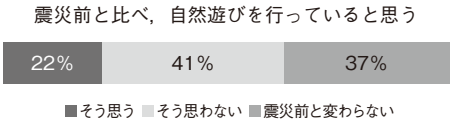

Figure. 2　自然遊びの実施に関する認識

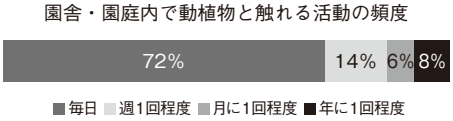

Figure. 3
園舎・園庭内の自然と触れる活動の頻度

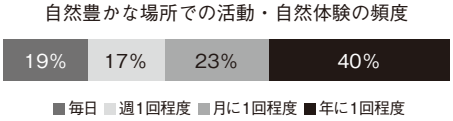

Figure. 4　自然豊かな場所での活動頻度

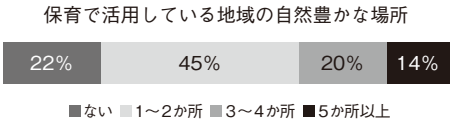

Figure. 5
保育で活用している自然豊かな場所の数

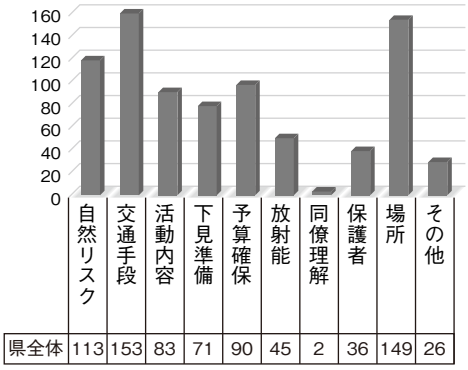

Figure. 6
自然豊かな場所で保育する際のストレス
（複数回答）

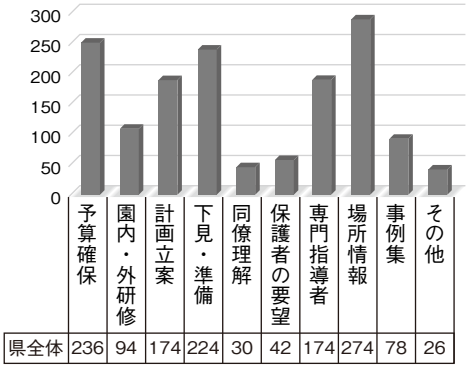

Figure. 7
自然豊かな場所での保育にサポートとして
有効な事項（複数回答）

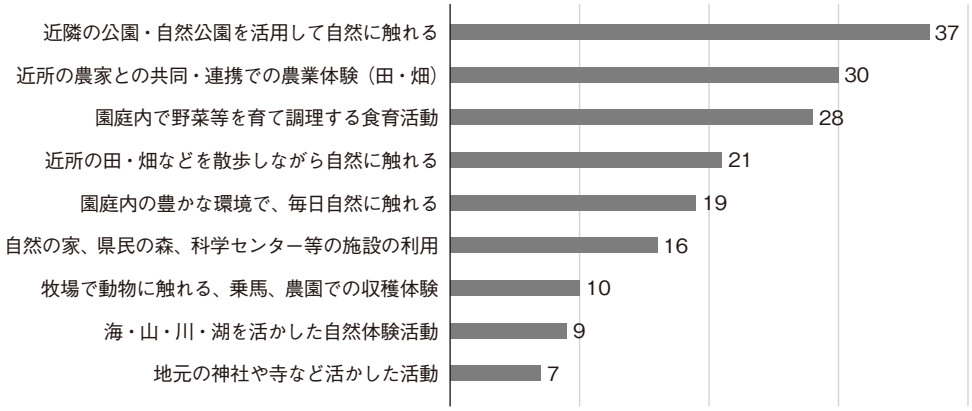

Figure. 8　自然保育・自然体験に関する実践例（自由記述）

の内，137の保育施設からの回答があり，複数回答を整理すると177の項目を抽出した。最も多かったのは，「近隣の公園・自然公園を活用して自然に触れる」が37件，次いで「近所の農家との共同・連携での農業体験（田・畑）」が30件，「園庭内で野菜等を育て調理する食育活動」が28件，「近所の田・畑などを散歩しながら自然に触れる」が21件であった。

これらの結果からも，多くの保育者が自然と触れる・関わる遊びの重要性は理解しつつも，地域の資源を活用した自然保育の実践は，必ずしも多いとは言い難く，その教育的意義や可能性の認識を向上させることが重要であると言える。加えて，地域の資源を活かす方法や保育デザインについても，事例の収集と情報の共有が喫緊の課題であると言えるだろう。

２）地域の資源を活かした国内の自然保育事例

次に、地域の資源を活かした国内の自然保育２例について論述する。事例１は，福島県田村郡小野町で実施している「おのまちわかばたんけんたい」で，事例２は，田村郡三春町で実施している「なかさとちびっこたんけんたい」である。事例１は，小野町の自然環境を活用し，歴史的資源や地元の食文化に触れる活動を通し，子ども達が小野町の素晴らしさを体験しながら学ぶことを目的にした活動である。筆者は2017年４月から外部講師として活動のプランニング，当日の指導を担っている。対象は小野町立小野わかば幼稚園の園児で，年中・年長併せて約40名である。実施頻度は年７回で，活動時間は移動時間を含めておおよそ９時から13時の４時間である。事例２は，2020年からはじまり，年４回の頻度で計画され，三春町の自然資源であるさくら湖周辺の自然公園を活用した保育活動を実施している。２つの事例に共通して活動場所への移動手段は，町のスクールバスを活用している。また，「たんけん」というテーマを設定することで，活動場所や活動内容の選定が容易になるだけでなく，冒険や挑戦の要素が子ども達に浸透し，期待感と達成感を得ることに繋がっている。さらに，この活動が通常保

育との繋がりを持てるよう園の職員と工夫しながら活動を計画している。例えば，登山に向けてどうやって体力をつけるか，地元のお店を調べて収穫祭で使用する食材を買いに行く，バスでの移動をあえて電車に乗って移動するなど，子ども達が主体的かつ協働的に取り組めるような工夫を取り入れている。

これら２つの事例から，自然公園，散策路や遊歩道，地域の田畑，山・川・湖，神社仏閣などの歴史的資源等の活用方法や教育的意義について、多角的な検討を試みる。また，地域の人的資源との連携や保育者養成の視点からも考察を加える。

①公園の活用

地域の自然資源としての公園の活用について、事例１の実践で活用しているのは，緑とのふれあいの森公園[7]である。この公園は，雨天でも活動できる森の体育館と称する屋外スペース，野外炊事場，畑，浅瀬の池，遊歩道，マウンテンバイクのコースなどがあり，探検をテーマにした活動を実施するには最適な公園である。これまで，園外保育として活用されることは少なく，この実践を機に園外保育の場，自然保育の場としての有効性が見直された公園と言える。小野わかば幼稚園からは8.4キロに位置し，バスを活用すると約15分で到着することができる。年７回のうち３回をこの公園で活動している。また，屋根付きの屋外スペース（森の体育館）があるため，雨天時に急遽この公園を活用することもある。

第１回の活動では，はじめに探検の心得を確認し，危険な動植物に関する注意喚起や公園内でのルールを確認した後，動植物とのふれあいをテーマに公園全体を使って探検ビンゴ（図１）を実施している。第６回の活動では，春に苗を植えたサツマイモの収穫を行い，秋の収穫祭をテーマに野外料理に挑戦している。年中児は焼き芋（図２）と羽釜での炊飯（図３）を担当し，年長児は芋煮（豚汁）を担当（図４）している。先述したが，年長児は前日に芋煮の食材を調達するため，グループに分かれて地元の八百屋で買い物を行っており、そのことで調理に対するモチベーションが向上していた。

図１.池のカエルを探す様子

図２.焚火の説明を聞く様子

図３.羽釜でご飯を炊く様子

図４.秋の芋煮会の様子

事例２の実践では，主に三春の里農業公園[8]を活用している。この公園は，以前から園外保育として活用されていたのだが，遊具での自由遊びが中心であった。改めて公園を見直すことで，三春ダム展望台へ続く遊歩道や湖岸，池やビオトープなど，自然保育を実践する上で豊か

な環境が整った公園であることがわかった。中郷幼稚園からは2.2キロに位置し，バスを活用すると約５分で到着することができる。全４回のうち３回をこの公園で実施する計画である。第１回の活動では，三春ダム展望台へ続く遊歩道を活用しての探検を実施した。往復約２キロのコースを設定し、ほどよく起伏もあり，さくら湖を一望できる景色が広がり、反対には畑や住宅を見下ろすこともでき，幼児でも十分に自然を満喫することができた。近隣の公園を活用する際，ブランコや滑り台といった遊具での遊びが中心となりがちだが，公園内の自然環境を活用したり，２キロ程度のトレッキングコースを設定したりすることで，目的地を目指すという意味や目的が生まれ，自然と触れ合いながら達成感を得る活動を展開することができる。第２回の活動では，年長児と年中児に分かれ，年中児は箱眼鏡を活用して水中生物を探索（図５）した。自然環境での生き物との関わりは，没頭する場面，対話や協働的な学び（図６）の機会が豊富であり，自然環境で保育活動を実施する利点と言える。さらに，この回で捕獲した数匹のザリガニは，子ども達が相談し，幼稚園で飼育することに決定したのだが，幼稚園に戻った数人の園児が図鑑を広げ、何を食べるか，どこで寝るかなど，自発的に調べていた。こうした一連の体験の中で，好奇心や創造力を発揮して取り組むことや、命に対する責任を実感することも，自然保育の教育的意義といえる。一方，年長児は，ライフジャケットを着用して湖岸に移動（図７）し，カヤックのルールや安全に関する説明を聞いて，さくら湖に出艇した。普段は上から眺めるさくら湖を，カヤックに乗って湖面を移動することで，いつもと違った景色に興奮（図８）し，魚を探す子や推進力が気になる子，行き先を指示する子など，湖とカヤックの魅力を全身で感じることができた。幼稚園に戻ってからも興奮が収まらない様子で，子ども達の心が動く体験となったようである。この活動を通しては，浮力に関するアクティビティや帆船作りなど，水を活用したテーマ活動に発展させることもできる。次年度の活動に向けて，子ども達の興味・関心がどこへ向くかを丁寧に探りながら，発展させる予定である。また、カヤック体験は，保育者が容易にできる活動ではないが，地元の自然学校やカヤックスクールの協力を得るなど，地域の人的資源を活用することで，保育の幅を広げることができる。日本国内には自然環境の豊かな公園が多数あるのだが，その優れた場所や環境が保育で活用されることは少なく、保育環境としての可能性について再検討することや，その環境を活用した事例を積み重ねて発信することが重要である。

図５.捕獲する様子

図６.ザリガニの様子を伝え合う様子

図７.湖岸へ探検

図８.カヌーで湖面探検の様子

②歴史的資源としての神社仏閣の活用

日本国内には，ほとんどの地域に神社仏閣があり，その多くは自然豊かな場所にある。この神社仏閣も，歴史的資源として自然保育に活用することができる。事例１の第２回では，小野町の名所である東堂山満福寺[9]を会場にした活動を展開しいる。東堂山満福寺は，標高659メートルの東堂山の中腹に建ち，430体以上の羅漢が有名である。小野わかば幼稚園からは8.2キロに位置し，バスを活用すると約15分で到着することができる。この東堂山満福寺の境内に繋がる散策路は，第１回で紹介した緑とのふれあいの森公園に繋がっており，片道約1.5キロの自然豊かな登りは幼児のトレッキングに適したコースである。この回は，子ども達に探検地図を配布し，お参りをする（図９），羅漢様と同じポーズをする（図10），根っこ道を歩く（図11）などのミッションをクリアしながら進むオリエンテーリング形式で探検する活動である。緑とのふれあいの森公園のゴールには，キビタン（福島県のマスコット）の石像があり，そこで記念写真を撮影したら終了（図12）である。地図を片手に進む子ども達は，大きな岩や根っこ道に苦労しながらも，最後のシンボル的なキビタンの石像を発見するころには，達成感と満足感を得ることができる。

図９.お参りの様子

図10.羅漢様の真似

図11.根っこ道を歩く様子

図12.ゴールのキビタンと記念撮影

事例１の第５回は，諏訪神社と小峰遊歩道を活用した活動である。諏訪神社の爺スギ媼スギ[10]は樹齢1200年の国天然記念物であり，ふくしま緑の百景にも指定されている。小野わかば幼稚園からは4.8キロに位置し，バスを活用すると10分ほどで到着する。先述したが年長児は小野新町駅から夏井駅までの一区間を電車に乗ることで，活動日の前から期待感が高まっていた。また，この小峰遊歩道のゴールに爺スギ媼スギがあり，程よく起伏がある１キロほどの距離は幼児のトレッキングに適しているのだが，これまではあまり活用されていなかった。紅葉の森を歩き始め（図13），木の実を拾いながら500メートルほど登ると，夏井千本桜で有名な夏井川を見下ろせる展望台があり，夏に沢遊びを楽しんだ夏井川に向かって，「ヤッホー」と叫ぶ（図14）など，子どもの遊び・楽しみは多様である。お弁当を食べ終えると，諏訪神社に向かい探検再開である。20分ほどで諏訪神社に到着すると「翁スギ・媼スギ」に到着し，子ども達と体を使ってその大きさを計測した（図15）。

図13.小峰遊歩道の探検

図14.展望台でヤッホーと叫ぶ様子

図15.諏訪神社の爺スギ媼スギ

③川および山の活用

事例１の第３回の活動は，小野町の名所であり夏井千本桜で有名な夏井川[11]での活動である。この夏井川を活用しての活動は，河原の昆虫探索と沢遊びである。前半は，年長組が川原で昆虫探索を楽しみ，カタツムリ，カエル，トンボ，ナナフシ，蝶々とたくさんの生き物に触れることができる。川岸まで下りると虫捕り網で小魚を捕まえることもできる。一方，年中組はライフジャケットを着ての沢登りである。はじめて川に足を踏み入れる子が多く，濡れる靴と洋服に戸惑う子，怖さを感じる子もいる中，砂利と流れに足をとられながら，上流に設定したゴールに向かって歩きはじまる（図16）。怖さを乗り越え，流れに負けず，ゆっくりと進み，ゴールへ辿り着いた子ども達の表情は満足気で，その後は自由に沢遊びの時間を楽しむ。その後，年中組と年長組が交代し，年長組の沢登りがはじまる。年中組より深さと流れの強いコースを設定し，ゴールを目指す。昨年の活動を覚えている子も多く，ゴール付近の岩場で流れを楽しむ子（図17），歩いてきたコースを浮きながら流れて下る子（図18）など，それぞれに川を満喫することができる。この夏井川は，以前は河原で遊ぶ子どもが多かったようであるが，最近はこの河原で遊ぶ子どもの姿はほとんど見られないという。こうした比較的浅瀬で流れの穏やかな川は，各地にあるのだが，保育活動として活用されることはほとんどない。川の活動は，生き物に触れ，水の勢いを全身で受け止め，浮いたり，流れたりと，自然の魅力をダイナミックに体験できると同時に，その危険さについても身をもって学ぶことができる。近年，川や海の事故が報道されるたびに，保育や教育の場から川の活動が遠ざかっているように思えるのだが，実際に河原で活動することで，ライフジャケットを着用することの重要性や流れや深さがあることなど，自らリスクを評価する力を養う機会としても有効な活動である。さらに，この活動のお便り等を通して，保護者に対しても川遊びのリスクを啓発することもできる。

事例１の第４回では，高柴山[12]の登山を実施している。高柴山は，田村市と小野町にまたがる標高884.1メートルの低山で，山頂付近は約３万株の山ツツジが自生することで知られ，うつくしま百名山に選定されている。登山口は浮金，牧野，門沢と３つあり，この活動では頂上まで1.1キロで，所要時間が30分ほどの浮金登山口からのルートを活用している。登山を保育活動に取り入れることは川の活動と同様，一般的ではないかもしれないが，片道1.1キロであ

図16.夏井川探検の様子

図17. ゴールで沢遊び

図18. 流れを体感する様子

れは普段の活動と変わらない。この登山については，前回の活動の終わりに予告として「次は登山に挑戦します」,「登山は体力が必要だよ」とだけ伝えている。翌日から年長組は「体力ってなんだろう」,「体力はどうやったらつくのだろうか」と，主体的かつ協働的に作戦会議がはじまり，マラソンをする子，鬼ごっこをする子など，それぞれに体力作りに励んだようである。このように登山についても，一日の行事で終わるのではなく「体力づくり」というテーマ性のある子ども主体の活動が１か月にわたり展開されている。当日は，体力づくりの甲斐もあり，2017年と2018年は小雨だったが，登山口で子ども達に挑戦するか中止にするかを相談した結果,「僕たち体力があるから大丈夫」という声が多数あがり，挑戦することになった。当然ながら十分な下見を行った上で実施した。図19は，小雨が降る中，木の実を拾ったり，見たことのないきのこに遭遇したりと，雲の中のたんけんを満喫する様子である。図20は，頂上での記念撮影の様子であり，図21は，お弁当を食べている様子である。子ども達より保護者の不安が大きかったようであるが，降園の際に見せた満足気な子どもたちの表情を見て納得したようである。一般的に登山と保育活動は結びつかないかもしれないが，幼児の体力に応じて，コースや山を選定することで，保育に活用することができる。例えば，頂上まででではなく，途中の大きな岩や滝などをゴールに設定したり，近所の丘や裏山を活用したりすることもできる。こうした地元の自然環境を保育活動に活用することで，地域の自然とその魅力を体験しながら学ぶことに加え，先に述べたような主体的で協働的なプロジェクト活動やテーマ活動として展開することができる可能性があることも強調しておきたい。

図19.小雨の中の登山の様子

図20.頂上で記念撮影

図21.霧の中のお弁当

④自然保育を保育者養成校の授業に取り入れる工夫

これまで取り上げてきた地域の資源を活かした保育活動は，保育者養成の視点からも意義があると考えられる。こうした地域の活動をフィールドワークとして授業に組み込むことで，学生たちが地元の豊かな自然環境を見直すきっかけとなり，その自然環境を活かした保育の展開方法を学ぶことができる。筆者が担当する卒業研究では，毎回３～５名の学生が地域の実践に参加（図22）し，テーマに分かれて自然保育に関する研究を進めている。特に，現在の福島県の学生は，東日本大震災当時は小学生であり，放射能の影響から自然遊びが制限され，経験的にではなく知識として自然遊びの重要性を理解している学生が多い。こうした背景もあり，筆者が担当する卒業研究では，地域連携事業への参加と同時に，保育に活用できる地元の川（図23，24），山（図25），自然公園などを調査し，その環境を活用した年齢ごとの保育活動について研究している。さらに，こうした保育者養成校の学生が地元の自然の魅力や価値に気づき，自然保育の重要性を実感することで，保育士不足が深刻な地方にとって，就職という観点からも新たな可能性を生み出すことができるのではないかと期待している。現に鳥取県智頭町では，豊かな自然環境を求めて子育て世代や保育士が移住している事例が報告されている。地域の資源を活かした自然保育は，地方創生の観点からもその効果と期待が高まっているといえる。

図22.事例１の活動

図23.郡山市大滝渓谷での調査

図24.沢遊びの様子

図25.磐梯山登山の様子

３）国外（デンマーク）の事例

次に，国外の事例として筆者がこれまでに調査訪問したデンマークの実践から，自然資源を活かした保育事例を取り上げる。はじめに取り上げるのは，首都コペンハーゲンから西へ35キロに位置するロスキレ市の住宅街にあるクロスターマルケン総合保育園（Børnehuset Klostermarken）である。この園は，園庭が広く樹木に囲まれ（図26），畑で様々な植物や果物を栽培している。また，昼食やおやつを食べる屋外のランチスペース（図27）や焚火スペース（図28）があり，外で生活する環境が整っている。夏は，ほぼ毎日を園庭で過ごし，冬は意図的に午後の２時間を外で過ごしていることから、自然を活かした保育は毎日園庭で行われている。加えて，この園では週 １ 回程度の頻度で「ツアーデイ」と称した園外保育の日が設定されている。ツアーデイの大半は徒歩で近隣の自然公園へ行くのだが，テーマによっては地域の博物館やネイチャーセンターを活用し，電車で首都コペンハーゲンに出かけることもある。先

に福島県内の保育施設における自然豊かな場所での活動頻度について，約４割が年に１回程度と回答したことを考えれば，園外の資源を活用することに対する意識が高く，そのことが一般化されていることがうかがえる。また，デンマークのナショナルカリキュラムにおいては，６つのテーマ[13]が設定されており，自然に関連するのは，「自然と自然の現象」である。この「自然と自然の現象」に関連したアクティビティを提供するネイチャーセンターや自然学校が多く，保育施設のツアーデイで利用されている。デンマークでは，一般的な保育施設に対して自然遊びや環境教育をサポートする体制や団体が充実していることが見えてきた。

図26.園庭の一部 その他に畑や遊具もある

図27.屋外のランチスペース

図28.焚火スペース

また，ほとんどの保育施設の園庭に焚火スペースが設置されている背景には，「自然と自然の現象」の中に火や水に関する活動について言及されているためである。また，この園に限らず，戸外での生活や自然を活かした保育が一般化されている理由の一つに，保護者のニーズが高いことがあげられる。近年の傾向としては，「健康と運動」についても関心が高く，この園でも金曜日を「運動の日」と定めて「体を動かす喜び」を長期のテーマとして保育が展開されている。この「健康と運動」というテーマからも，自然豊かな園庭での遊びや公園などを活用した園外の活動が位置づけられている。

次に，自然公園を活かして保育を実践している事例を２つ取り上げる。１つめは，首都コペンハーゲンから北へ12キロに位置するクランペンボー市にあるスコウボ森の保育園（Skovbo Skovbørnehaven）である。この園は，一見すると園舎と園庭を所有する一般的な保育園であるが，特徴は週の大半を近隣の広大な自然公園であるイェガースボルグ森林公園（Jægersborg Dyrehave）で過ごしている点にある。登園から子ども達が揃う９時までを園舎で過ごし，その後徒歩で約15分かけて公園内に移動（図29）する。その日の様子やテーマに沿って活動場所（図30）を選択し，４時間程度を公園で過ごし，14時頃に園舎に戻る。アート活動や音楽活動などは園舎で行うが，それ以外は基本的にこの森林公園で保育が展開されている。先述した通り，デンマークでは外遊びや森林を活かした保育に対する保護者のニーズが高いのだが，この園におけるリスクの捉え方と保護者との共有について，2017年に実施したインタビュー調査[14]から，主任のグランダル氏の回答を以下に一部提示する。

「興味深いのは，本園に通う子どもの保護者は，自然で遊ぶことに関心があり，本園に一番期待していることは，屋外で過ごすことであり，自然の中で遊ぶことなのです。さらに，保護者は本園の価値観を十分に理解し，園とスタッフに対して信頼を置いています。新入園児の保護者に対して一番大切にしていることは，信頼して任せて良いと思うところまで，具体的かつ正確にはっきりと伝えるようにしています。特に森に子どもたちを連れて行くとこんな危険やケガをすることがあるということを伝え，危険についても前もってしっかりと説明しています。大きなケガをした際の段取りも予め説明しています。もちろん，ケガをすることが良いということではなく，子ども達の成長にとって，森の中での遊びが大切なことであるということを十分に伝えています。つまり，リスクをすべて管理し取り除こうとすることは，子ども達がこうしたら危ないということを学ぶ可能性と機会を奪っていることでもあるのです。また，本園では，送り迎えの際に１分でもいいからエピソードを話すように心がけています。その他に，保護者交流会（週末就労日）があります。この交流会は自由参加で，保護者が棚をつけたり，ウサギ小屋の掃除をしたりして，その後にケーキやサラダなどを持ち寄りグリルを楽しみます。毎日のコミュニケーションに加え，保護者が定期的に園に来る機会を設定することで，園や自然公園におけるリスクの存在やそこでの子どもの遊びを理解することができるのです。」

図29.徒歩で公園へ向かう様子

図30.公園内にある活動場所の一例

図31.それぞれに遊びを展開する様子

先に本稿で取り上げた保育者を対象とした調査においても，自然保育を実施する上でのストレスで３番目に多かったのが自然のリスクである。保育者のリスクマネジメント能力を向上させることや，子ども達の危険予知・回避能力を高めることも重要であるが，保護者のニーズを高め，安心感と信頼感を得るためには，グランダル氏が述べたように子ども達の成長にとって，森の中での遊び（図31）が大切なことであるということを十分に伝えることに加え，保護者交流会等を通して，自然保育におけるリスクの存在や，子どもの成長について理解してもらう仕組みや工夫が重要であることも見えてきた。

２つ目の事例は，首都コペンハーゲンから北へ15キロほどのリュンビューターベック市の住宅街にあるローゼンリュースト総合保育園（Børnehuset Rosenlyst）である。この園は，園の方針として毎日外で遊ぶことを掲げており，園庭（図32）はそれほど広いわけではないが，屋外

で昼食やおやつを食べるスペース（図33）が３か所，焚火スペースが２か所，納屋のような午睡スペースがあり，１日中屋外で過ごせるように工夫されている。この園の特徴は，４歳児までは園舎と園庭を中心とした一般的な保育を展開しているが，５歳児になると森グループへ移行し，火・水・木曜日の週３日を近隣の森で過ごしている（図34）。この森グループを設定した背景には，園庭が広くないことに加え，子ども達と歩いて行ける距離に自然公園が３か所あり，日常的に活用していたこと，保護者からのニーズが高かったことがあげられると副園長のソターセン氏は話した。今では，この森グループに入れたいがためにこの園を選ぶ保護者が多いという。この園では，５歳児になると森グループに移行するのだが，グループによって特徴を掲げる考え方は，デンマークに限らず，ヨーロッパでは一定の理解が得られている。筆者らはフィンランドにおける森を中心とする保育施設の調査を実施し，同じ保育施設の中に森の妖精グループとシュタイナーグループから選択できる仕組みを導入している保育施設について報告[15]している。日本国内においては，幼稚園や保育園に理念や特徴があるのが一般的だが，クラス単位で異なる保育理念や特徴を打ち出すことはほとんどない。この園の様に，ある程度危険を予知できる年中児や年長児から地域の自然環境を活かした保育を中心に据えるような特徴のあり方とその多様性は，地域の自然環境に恵まれた日本において興味深い事例と言える。

図32.園庭の様子

図33.ランチスペース

図34.森グループの活動の様子

次に，自然を活かした教育活動を提供する団体を２つ取り上げる。１つめは，首都コペンハーゲンから南へ10キロに位置するアマー自然公園（Naturpark Amager）[16]内にあるトーンビュー自然学校（TårnbyNature School）[17]である。アマー自然公園は広大な森と草原が広がり，海にも面していることから，多様なアクティビティを体験することができる。トーンビュー自然学校の他に自治体とデンマーク自然庁[18]が運営する自然学校が２つあり，コペンハーゲン近郊における環境教育の拠点となっている。訪問時も近隣の学校や保育グループの子ども達がアクティビティを体験していた。

トーンビュー自然学校（図35）は，主にトーンビュー地区の学校や保育施設を対象にアクティビティの提供や環境教育のコンサルティングを行っている。校長のヤコブ・イエンセン氏から幼児向けアクティビティに関する説明と活動の様子（図36．37）を紹介していただいた。

図35.トーンビュー自然学校のシンボル

図36.幼児向けアクティビティの様子

図37.幼児向けアクティビティの様子

主に森や海に生息する動植物に関するアクティビティ，地形・季節・健康に関連したアクティビティを提供しており，様々なニーズに対応できる準備がなされていた。他の自然学校においても幼児を対象としたプログラムが充実しており，先に述べた「ツアーデイ」として活用されていることが理解できた。また，教師を対象とした研修も頻繁に行われている。

２つ目は，首都コペンハーゲンから南へ６キロに位置するアマーストランドネイチャーセンター　(Naturcenter Amager Strand)[19]である。このアマーストランドネイチャーセンターは，海岸公園であるアマーストランドパーク (Amager Strand park) の中心部にあり，海岸という環境を活かした海のアクティビティが提供されている。海辺の石，風，生き物，魚，エビ等のパッケージ化された幼児向けのアクティビティが用意されている。図38は，当センターが発行しているアクティビティテキストである。訪問当日は，コペンハーゲン市内の小学５年生が「浅瀬の生き物」，保育園５歳児が「海辺の石」(図39.40) のアクティビティを体験していた。

２つの団体に共通して言えるのは，地域の自然資源を活かした幼児向けのアクティビティが豊富であることと，これらの施設やアクティビティを利用する保育施設が多いことが挙げられる。その背景には，デンマーク自然庁のホームページ内にネイチャーセンターや自然学校の情報が掲載されており，管轄する自治体ごとに情報が整理されていることも挙げられる。日本国内においても幼児向けのアクティビティを提供している施設や団体は多数あるのだが，保育者側から情報を得るためのプラットホームは整備されていないのが現状である。加えて，デンマークでは幼児向けのアクティビティを開発・運営・発信するための国や企業からの助成の仕組みが整備されていることも申し添えておきたい。

４．まとめ

本研究はこれまでに筆者が調査した海外の保育事例および国内で実践している保育活動を基に，地域の資源を活用した自然保育についてその可能性を概観してきた。事例を通して，地域資源が保育実践に与える教育的効果の可能性が見えてきたところであるが，わが国で広く自然保育を取り入れる事の難しさも見えてきた。この難しさは，日本の保育実践の場や子育て世代

図38.パッケージ化されたプログラム集

図39.幼児向けの石のアクティビティ

図40.フィールドの様子

が，自然保育の教育的意義について理解する機会が海外に比較して圧倒的に少ないことがもたらすものだと考える。

ここ数年，非認知能力の重要性について様々な場で語られているが，自然保育の実践に携わる者ならば，自然環境には，非認知能力が発揮される場面が多いこと，そして自然環境においてこの能力が豊かに発展していく過程を日常的に目の当たりにするだろう。現在の日本では，自然環境における非認知能力という教育的効果にだけ注目が集まっている。しかし，世界の動向を見てみると，自然保育における認知的能力の発達にも目が向けられており，STEAM（サイエンス・テクノロジー・エンジニアリング・アート・マスマティクス）やSDGsの視点からも関心が寄せられている。さらに，テーマ活動やプロジェクト型の保育として幼児教育に浸透している国が多い。本研究で取り扱ったデンマークの事例からも，自然学校が地区の学校や保育施設にアクティビティや教育環境のコンサルティングを行うなど，地域における包括的な取り組みが自然という資源を多面的に利用する仕組みづくりへとつながっている事がうかがえる。

また，ここまで示してきた事例により，自然環境を主眼に置いた保育実践では，子どもと環境，保育者が応答的な関係にあることが見えてくる。つまり，天候や生き物，危険さといった自然環境の不確かで予測不可能な側面が，保育者のあらかじめ準備する計画の範疇を超えるため，絶えず子どもも大人も自然に対して真剣に目や耳を傾ける，すなわち自然との対話が求められるのである。このような環境との応答的な関係性は，学び手に求められる行為主体性を育むうえで重要な要素となり，この視点からも自然環境をいかした保育実践の可能性を見出すことができる。

以上のことから，今後わが国において自然という資源を生かした保育実践により幅広い学びを展開していこうとするならば，海外の自然保育をモデルとしたり，日本の特性を踏まえた独自性を模索しながら実践を重ね，実践者と研究者が資源としての自然の可能性，利便性，危険性などについて丁寧に議論していくことが必要であることは明らかである。本論が，子どもの行為主体性を育む保育実践へ，自然という資源がどのように寄与できるかを考える一助になることを願う。

注

1）文部科学省（2018）「幼稚園教育要領解説〈平成30年３月〉」.フレーベル館

2）公益社団法人国土緑化推進機構（2018）「森と自然を活用した保育・幼児教育ガイドブック」. 風鳴舎

3）松橋圭子，他５名（2010）「保育施設における屋外環境と園外活動の実態からみた地域資源のあり方に関する研究」．日本建築学会計画系論文集　第75巻　第651号　1017-1024

4）柴田卓（2019）「福島県における外遊びと自然保育の現状―保育者を対象とした質問紙調査から―」. 日本自然保育学会.自然保育学研究第２集　展望　P40-P46

5）柴田卓.他（2020）「東日本大震災後の幼児の発達に関する保育者の意識調査―福島県内の保育者を対象とした質問紙調査から―」.郡山女子大学紀要第56集．P149-P159

6）前掲２）P62.表３

7）緑とのふれあいの森公園.小野町公式ホームページ（2020.9.20現在）
https://www.town.ono.fukushima.jp/soshiki/7/hureai-park.html

8）三春の里農業公園.三春町公式ホームページ（2020.9.20現在）https://www.town.miharu.fukushima.jp/site/ijyu/kouen.html

9）東堂山満福寺：小野町の標高659メートルの東堂山の中腹に建つ満福寺。境内奥には昭和60年から奉安が始った430体以上の個性あふれる羅漢様を見ることができる。
福島の旅「福が満開，福のしま」福島県観光復興推進委員会ホームページ（2020.9.20現在）http://www.tif.ne.jp/jp/spot/

10）諏訪神社の爺スギ媼スギ：坂上田村麻呂に従って下向してきた藤原継縄(つぐただ)公が，戦勝を祈願して手植したと伝わる樹齢およそ1200年の鳥居杉(翁媼杉)がある。福島の旅「福が満開，福のしま」福島県観光復興推進委員会ホームページ（2020.9.20現在）http://www.tif.ne.jp/jp/spot/

11）夏井川：夏井川は，福島県東部の阿武隈山地中央部に源を発し，西流して小野町夏井地区で南東に向きを変え，いわき市北部を横断し太平洋に注いでいる67.1キロメートルの２級河川。
小野町公式ホームページ（2020.9.20現在）
http://www.town.ono.fukushima.jp/soshiki/7/sakura-natsui.html

12）県立自然公園高柴山：標高884メートル.毎年５月下旬に，約３万株のヤマツツジが咲き競う名スポット。登山口は，浮金登山口（小野町）・牧野登山口（田村市大越町）・門沢登山口（田村市船引町）がある。小野町公式ホームページ（2020.9.20現在）
http://www.town.ono.fukushima.jp/soshiki/7/mt-takashiba.html

13）青江知子，大野睦子ビャーソー（2010）「個を大切にするデンマークの保育―パピロン総合保育園から学ぶ―」．山陽新聞出版センター

14）柴田卓，伊藤哲明，柴田千賀子（2019）「デンマークの自然保育における保育環境とリスクに関する研究―森の保育園実践者によるインタビューを中心に―」．郡山女子大学紀要第55集．P287-P298

15）柴田卓，柴田千賀子（2018）「保育環境としての「自然」に関する一考察 ―デンマーク・フィンランドの実践に着目して―」．郡山女子大学紀要第54集．P135-P145

16）アマー自然公園（Naturpark Amager）公式ホームページ（2020.9.20現在）
https://naturparkamager.dk/
アマー自然公園は，トーンビュー自然学校の他にラードヴァドネイチャースクール（Raadvad

Naturskole）とコペンハーゲン自然学校（Københavns Naturskole）があり，コペンハーゲン近郊の保育施設や学校に対して環境教育に関するアクティビティを提供する拠点となっている。

17）トーンビュー自然学校（TårnbyNature School）ホームページ（2020.9.20現在）
http://naturskolen.skoleporten.dk/sp/254502/foreside?pageId=8734d26d-38b1-4b48-8e85-30a0ceaf23f2

18）デンマーク自然庁（Miljø- og Fødevareministeriet Naturstyrelsen）
公式ホームページ（2020.9.20現在），https://naturstyrelsen.dk/
Naturskolerのページからデンマーク国内の自然学校と自治体を確認することができる。

19）アマーストランドネイチャーセンター（Naturcenter Amager Strand）公式ホームページ（2020.9.20現在）https://naturcenteramagerstrand.dk/

参考文献

１）山田千愛，他５名（2019）「園外活動における子どもの発達を促す地域環境―散歩を通した子どもの育ち―」．植草学園大学研究紀要　第11巻．P53-P63

２）井上美智子（2009）「幼児期の環境教育研究をめぐる背景と課題」環境教育学会，環境教育研究Vol.19-1

３）秋田喜代美，他４名（2018）「園庭環境に関する研究の展望」東京大学大学院教育学研究科紀要第58巻

４）矢島毅昌，他２名（2014）「地域資源を活用した保幼少連携カリキュラムにおける課題と可能性の考察」．しまね地域共生センター紀要　Vol. 1　P23-P31

５）境愛一郎（2019）「自然環境を活用した保育への転換に伴う保育者の意識変容と葛藤～固定遊具から森へ～」．宮城学院女子大学発達科学研究2019.19.P25-P36

附記

本研究は，科学研究費助成事業　基盤研究（C）（一般）課題番号19K02662

研究課題名　ヨーロッパの都市部における自然保育の実践とその教育的意義に関する実証的研究より，一部助成を受けて実施した。